

生命と倫理 1回目

アイズブレイク

死生観について



講師紹介

氏名 : 森岡 昭雄 1960年生 男

出身 : 京都府 宮津市

経歴 : 病院検査技師長・事務長
医療系大学講師
営利法人・代表取締役

研究 : 細胞生物学 神経機能
がん遺伝子 生命倫理
社会経済学 医療経済学

学位 : 福祉経営学修士

資格 : 臨床検査技師 社会福祉士
介護福祉士 介護支援専門員

趣味 : モータースポーツ
マリンスポーツ

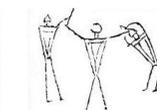
授業に関する資料などについて

株式会社まかせてホームページ
→ 社長室 → 授業資料室

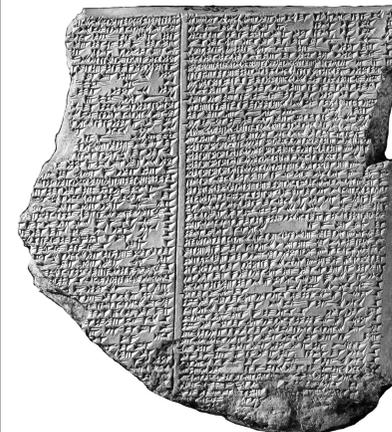
facebook 森岡吉右衛門

youtube 森岡教室

古代文明の死生観



メソポタミア文明
BC4000~
ギルガメッシュ叙事詩
死の恐怖
友情の光輝
親友の死
ゾンビの原型

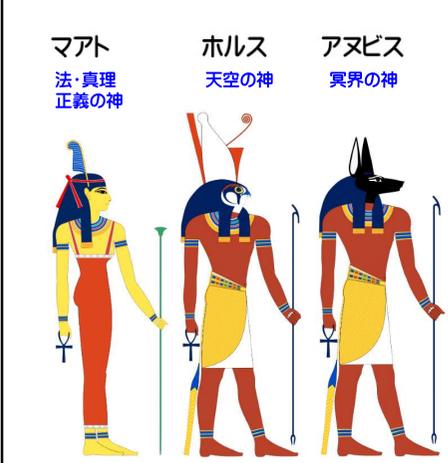


メソポタミアの文明では、
死者の供養は
死者に対する感情を
納めるだけでなく、
関係する者たちの共同体の
連帯を強化させ、
社会集団を
安定的に持続させる
機能を持つことにも
なっていたと考えられる。



エドウィン・スミス パピルス
 内臓の形や病気の発生、
 外科手術、薬の調合など
 が記されたパピルス

エジプト文明 BC3500~
 死後の再生を信じる文明
 アヌビス神は冥界神で、ミイラ作りの神
 第二の誕生を得るために肉体をミイラと
 して保存した
ミイラ作りの神官は高い地位を持つ



マアト
 法・真理
 正義の神

ホルス
 天空の神

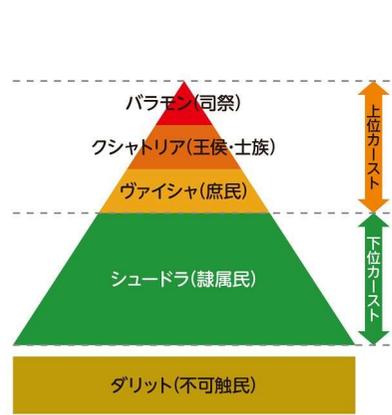
アヌビス
 冥界の神

古代エジプト文明では
「心臓」が復活の鍵であった。
 冥界でアヌビスらにより
「心臓の計量」が行われる

「マアトの羽根」よりも重いと
 怪物アメミットに食べられて
 死者の魂は
 永遠に消滅するとされた




インダス文明 BC2600~
 都市は計画的に作られ、城壁・上下水道・道路網・レンガ造りの
 建物・公衆浴場や市場・倉庫なども設けられていた。
 文字は現在でも解読されていない。
 この文明が衰退した頃、バラモン教やヒンドゥー教の原型である
「ヴェーダ教」が形成され、経験からくる原始的な医学が進み、
ススルタ大医典がつけられた。

ヴェーダ教の教義は
「業（ごう）」と「輪廻（りんね）」
 と**「解脱（げだつ）」**である。

業は、全ての生物が生きていた時の
 善悪であり、業の良し悪しで、魂が
 何に生まれ変わるかが決まる（輪廻）

この**輪廻は、魂にとって最大の苦痛**
 であり、**解脱はその苦痛からの解放**
 である。

カースト制度をもち、ヒンズー教や
 仏教の原型となる死生観があったこと
 がわかる。

黄河文明 BC2000~

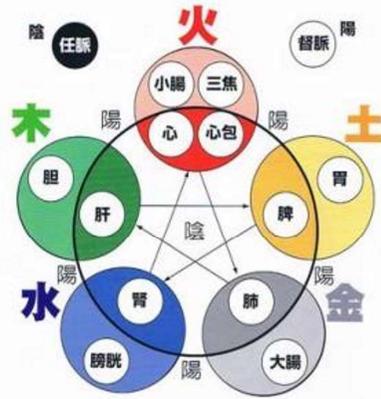
薬食同源思想 経験医学が発達

「食物は飢えた時摂れば食であり、病気の時に摂れば薬である」

食べ合わせ (合食禁)
食と健康に関する伝承

医食同源は日本の造語

中国の「薬食同源思想」から着想を得て、1972年に日本で造られた造語。日頃からバランスの取れた美味しい食事をとることで病気を予防し、治療しようとする考え方。



日本における合食禁 (抜粋)

天ぷらとスイカ

鱈(タラ)とスイカ

ウナギと梅干

タコと梅干

タコとアワビ

タコと蕨(わらび)

サメと梅干

カニと柿

カニと椎茸

カニと小豆(あずき)

エビと椎茸

ドジョウと山芋

胡瓜(キュウリ)と蒟蒻(コンニャク)

タケノコと黒砂糖

蕎麦と田螺(タニシ)

蕎麦と茄子(ナス)

クルミと酒

レバーと緑茶

スイカとビール

ラムネ菓子と炭酸

アサリとマツタケ

鯉(コイ)と生ネギ

河豚(フグ)と青菜

鮎(アユ)とゴボウ



中国文明の死生観を考える場合、老子の道家思想(道教)と孔子の儒家思想(儒教)がある。

道教は永遠の生命を得ることが最終目的となる観念がある。(神仙道)これは不老不死の薬物を錬成したり、肉体の「気」を利用して不老不死の「仙人」になる。しかし、現実には死は避けられないため、死ぬという手続きの後に仙人になるという「尸解(しかい)」の考えが生まれた。

儒教の死生観とは一言で言えば、「この世に永遠に生きていたい」という願望である。子孫が残る続けるならば、子は自分の遺体であり、自分もまた生き続けると考える。現代風に考えると、個体の自分は死ぬが、子孫という遺伝子は生き続け、肉体の永遠の可能性を信じるものである。

一方、精神(魂)は儒教では魂はあの世に行ってしまうのではなくこの世に残るとされる。だから、この世に残っているからこそ「魂を呼べば帰ってくる」ことができる」と考え、帰ってくればこの世にいるなつかしい家族(子孫)と出会うことが可能となる。これを招魂再生と言い、儒教はこれを信じている。



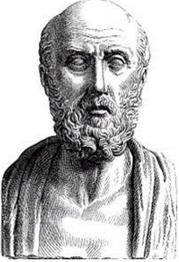
ギリシャ文明

BC 800~

神殿医学—アスクレピオス神殿
ヒュギエイア 薬の神様

ファイトケミカル
アロマオイルの使用
リリーオイル → 鎮痛効果
サフラン → 痛風予防

二匹の蛇の杖は
ヘルメスの杖
医学とは関係がない
ヘルメスは商売の神様
一橋大学などの校章で
使用されている

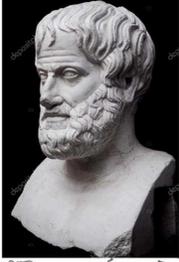


ヒポクラテス BC460~BC370年頃

医学を原始的な迷信や呪術から切り離し、臨床と観察を重んじる経験科学へと発展させた人物。自身は著作や施設を残さず、ヒポクラテスの行いは弟子たちの記録が残っているだけである。
ヒポクラテスの誓いは、現在の医療倫理の柱にもなっている。

ヒポクラテスの誓い




アレクサンダー大王は征服した都市をアレクサンドリアと名付け、戦死した敵の兵士の家族にも戦利品を与えた。このことで相互扶助が向上し、征服した都市の復興が早まり、商業や公衆衛生が進展し、文化が根付いたといわれる。

アリストテレスに影響を与えたヒポクラテスの倫理観がうかがえる。



古代ギリシャの死生観

死後の世界には天国や地獄の区別はなく、善人でも悪人でも等しく「冥界（ハテス）」に下るといふものである。

冥界には、現世と同じ世界があると信じられていた。しかし、死者が家族によって埋葬されないと「魂（プシュケ）」は冥界に行けず、地上を永久にさまようことになるとされており、家族に弔ってもらうことは古代ギリシャ人にとって「幸福」なことであった。

したがって、古代ギリシャ人の葬儀は「祝賀会」のようであったらしい。

日本の死生観

古来より日本には「八百万（やおよろず）の神々」を崇める神道（しんとう）が存在していた。

仏教は6世紀に百済から伝来し、神道派の物部氏と仏教派の蘇我氏が争って蘇我氏の勢力が勝り、日本は「神仏習合（神と仏は一体である）」という独特の宗教観の社会となる。

儒教も中国から入って来ていたが、その思想は憲法十七条などの政治理論の一部として利用されただけであった。



16世紀に**キリスト教**が到来したが、19世紀まで**仏教が最も影響力のある宗教**となっており、周囲のあらゆる神聖な存在を認め敬う信仰である**神道**も日本人の心に深く根付き続けている。

明治以降、日本は神道と仏教を分離し、西洋思想を積極的に取り入れていくが、キリスト教などを信仰する者はあまり増加しなかった。日本人には西洋思想の価値観に影響されにくい「何か」があるようだ。現在、キリスト教系の宗教団体に属する人は約190万人と全体の**1.5%**なのである。



日本の宗教観を考えると、正月には神社や寺院に初詣に行き、誰かが亡くなれば、仏教式のお葬式に参列し、お彼岸やお盆はお墓参りに行き、子どもが生まれたらお宮参りや七五三で神社に参拝する。

結婚式は神社や教会に出向いて行き、夏や秋はお祭りで騒いで、10月の終わりにはハロウィンでお祭り騒ぎをして、12月はクリスマス会で大騒ぎをして楽しんでいる。キリスト様はあまり関係ないのだ。

ドイツ生まれの曹洞宗僧侶である「ネルケ無方」は、日本人の宗教観について述べている。

日本人にとっての宗教とはその存在を意識せずとも身に付いているものであり、神社参りや葬式などを行うことは、宗教的行為ではなく慣習であるという認識をしている。

彼らは「空気を吸って吐くような自然な宗教観」を持っているというのである。



日本人は、信仰する宗教について尋ねられた際に「無宗教です」と多くの方が答えるが、実はネルケ無方が言う「空気を吸って吐くような自然な宗教観」を持ち続けているからこそ、そう言うのであろう。

近代の日本人の「死生観」についてもネルケ無方の考えと同様で、「**(空気を吸って吐くような) 自然な死生観**」といったものを持っているのであろうから、その表現もなかなか難しい。

日本人が漠然と抱いている死生観なるものは、強いて言うならば次のようなことであろう。

- ・「あの世」の世界があるみたいだが、「この世」とあまり変わらないようだ。
- ・人が死ぬと魂が肉体を離れてあの世に行って「神や仏」になるみたい。
- ・人は死ぬとみんな「あの世」で先祖の霊たちとある程度一緒に暮らすみたい。
- ・全ての生き物には魂があり、死ぬとすべて「あの世」に行くみたい。
- ・あの世で暮らした魂は、やがてこの世に帰ってくるみたい。